

これは隣に越してきた双子と僕のおなはし・・・

お隣さんと僕。

お隣さんと僕。



お隣さんと僕。

お隣さんと僕。

二人は僕の全てを破壊して僕の全てになった。
僕は二人のおもちゃ・・・犬・・・赤ちゃん・・・パパ・・・。
僕はただ体液を吐き出すだけの肉になる。

お隣さんと僕。



僕には優しい妻がいる。
大学のころから付き合っていて、
六年目でようやく結婚した。
いやだった会社勤めにも慣れ、
それなりに仕事にたのしみも見いだせてきた。
広い部屋ではないが、
マンションで二人暮らしをしている。
休日に二人でマイホームの夢なんかを話すのが、
今の僕の一歩の幸せだ……。



「いってらっしゃい」
「ちょっとちょっと、カバンは？(笑)」
「あ、ごめんなさい(笑)」
妻はちょっと天然がはいってて、
それもまたかわいい。
大好きな女性に見送られて出勤する。
帰ってきたらご飯の準備をして
笑顔で迎えてくれる。
なんという幸せ。そして、今はいけないけど、
二人の子どももきつといつかできるだろう…。
そんなある休日のことだった。



ピンポン、とインターホンがなり、
出てみると、女の子が二人立っていた…。
「こんにちは♡」「こんにちは…」
二人はまずあいさつをした。
僕の耳には、二人の元気な声と
か細い声が聞こえていたはずだった。
しかし、僕はまず二人の豊満…
という言葉では収まらないような
圧倒的な胸に目をうばわれた。





「あ……こんなにちは」
我に返り、急いで胸から目線を上げて、
あいさつを返した。
そしてだいたい遅れてからその二人の身長が
とても低いことに気づいた。
「ママにおとなりにあいさつ
してきなさいっていわれて〜♡」
と左の子が言った。
たぶたと元気に胸が揺れて、
またそっちに目が行ってしまう。
「あ、あいさつ?」

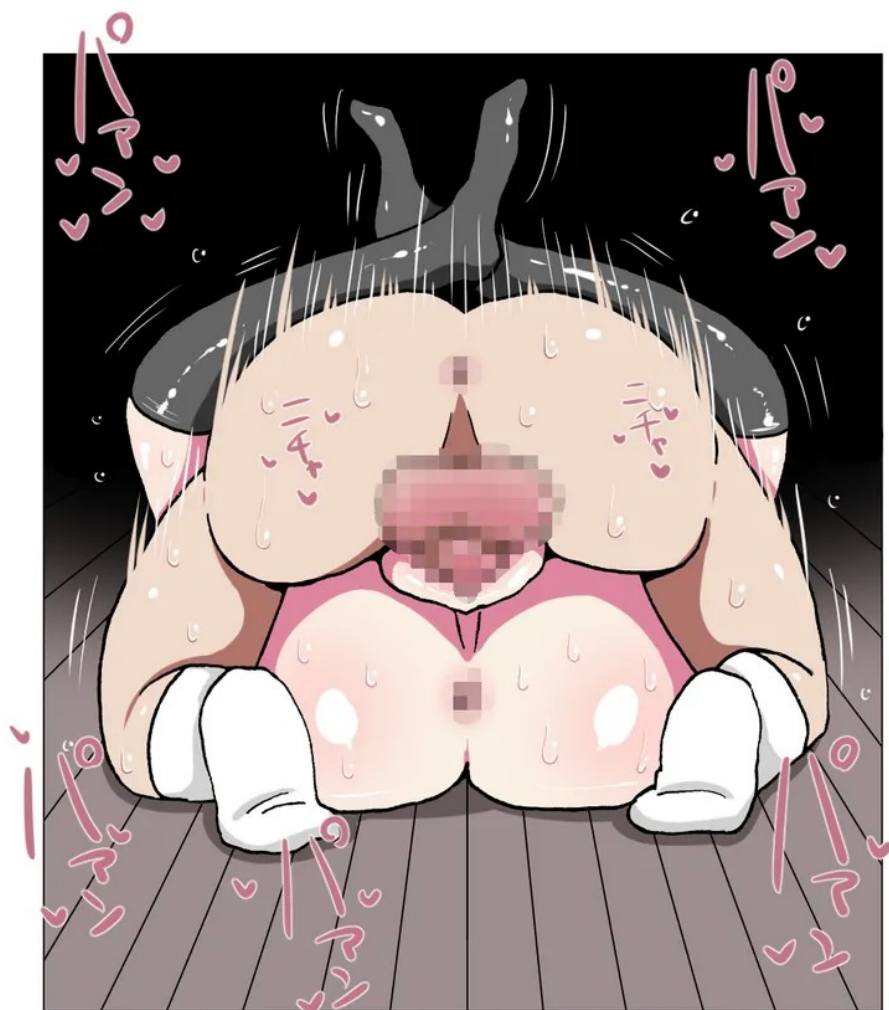


「ああ、そうか。お隣に越してきたんだね？」
隣は空き部屋だったことを思い出した。
「そうですね♡」たぶんたぶん。
また女の子の胸が揺れる。
僕の身長の子の半分くらいの子が、
ちようど僕のちんちんのあたりで、
たぶたと僕の胸を揺らしている。
僕はちんちんが硬くなっている。
(あっ……まずい、勃起がばれてしまう)



(ま、まずい、このままじゃ…)
僕はしゃがみこんで、2人の目線に
合わせるフリをして勃起を隠そうとした。
(あ…♡)
すると2人の爆乳が目の前にきて、
さらに我慢汁がどくどくと出てきた。
「あ、あの、パパとママは？」
注意をそらすと質問をする。
「ママはおでかけ♡」
「パパは今つかれてねちゃってるの♡」
「そ、そうなんだ」
僕の中に邪な心が生まれる感じがした。
「じゃ、じゃあまた今度、挨拶にいくよ…」

お昼のあの場に妻がいなくてよかった。
妻の前であんな小さな子のおっぱいで
完全に勃起して欲情しているところを
見られたら終わるところだった。
買物から帰ってきた妻を半ば強引に
押し倒して、さっきのムラムラを
解消しようとした。
「ど、どうしたのあなた♡あっ♡あっ♡」
「ごめん、急にしたくなつて。好きだよっ。好きだ」
「あっ♡すっ♡今日♡の♡」
「こんな硬いの♡はじめて♡」





ビュ：：ビュビュ：：ビュ：：♡
思い切り腰をぐりぐりと妻に押し付けて、
さっきの二人のせいで
こみあがっていた精子を妻の中に注いだ。
どくっ：：どくっ：：
とねばっこのいのが出てる感じがした。
「あっ♡あっ♡出てるっ♡すごっ♡
こんなたくさん：：♡」
一回の射精で妻の膣内は満たされたようだった。
結合部から精液がドロリと溢れ出す。
「ま：：まだしたい」

全然気分がおさまらない。僕はまた腰をふりだした。
「あ♡あ♡だめ♡もっ♡いったから♡」
「ごめんね、もう少しだけ…もう少しだけ…」
パンパンと肉がぶつかり、
ニチャニチャと精液がかきまぜられる音。
「好きだよ、好きだよ」
と言いなから、僕はさっきの爆乳を思い出しながら、
妻のマ◯コでち◯ちんをこすっている。
「あ♡あ♡私も♡」
妻がとてもうれしそうな顔をしながら、
僕を受け入れている。僕は最低だ…。
「また出る…」





二発目が出る。
ブリブリユブリユ
と精子を排泄する。
「ああ……出てる♡出てる♡」
妻がビクビクと痙攣している。
最後の精子まで出し切ろうと
妻を強く抱きしめながら、
妻の壁のようになく胸が入った。
欲がうすれていく。

「ごめん……」
「と言ってキスをした。
「なんであやまるの？
「こんなに思ってくれてうれしいわ……♡」
「妻が僕を抱きしめてくれた。満足したが、
「ひとまず僕の申し訳なくなつた……」
「妻にたいして申し訳なくなつた……」



次の日・・・
「いつてらっしゃい」
妻がいつも通り見送ってくれる。
でも、いつもより僕を見る顔がうつとりしている。
なんだかんだでセックスの回数は減っていたからか、
久しぶりにできてうれしかったようだ。
昨日のセックスで僕のオスを感じて、
妻はメスになっていた。
でも、僕は罪悪感を引きずったままだった。
ただ、あの爆乳をオカズに妻でオナニーしただけだった・・・。
「いつてきます・・・」



気分が乗らず、会社を早退した。
帰宅する途中、目の前を女の子が
歩いているのを見つけた。
後ろからでもハッキリとわかる。
横にはみ出した爆乳…あの子だ。
僕は音を殺して近づき、
後ろから女の子の胸元をのぞいた。
なんて大きさだ…。お尻の方もすごい…。
パンツはいてないのか…？
歩きたびに全身の肉が、ぶるぶるたふたふと揺れている。
目の前を歩くいやらしい巨大な肉の塊に、
僕の下半身はあっさり反応した。
(揉みたい…)



昨日も思ったが、
女の子はブラジャーをつけていないようで、
シャツの下の乳首のピンク色から突起まで
はつきりと浮き出ている。
こんな格好して、男を誘っているのか？
こんなの他の男に見られないわけがない。
下半身がムカムカしてきた。
こんなおっぱい見せつけられて、
手を出せないなんて…。
触れることができないなんて…。
このおっぱいが許せない…。
そのとき、女の子が振り向いた。



「あ、おとなりさんだ〜♡」
僕はあせりながらも、すぐにおっぱいから目をそむけて、
とぼけたフリをして今気づいたように見せかけた。
「あっ、えっと、あ…アヤちゃん？だっけ」
「こんにちは〜♡」
「こんにちは、今帰りかな…？」
「うん♡」(たぶんたぶん)
ニコニコとおっぱいを揺らす。
その一瞬でパンツは我慢汁でびちょびちょになった。
またムカムカしてきた。



僕は、このときすでに、
可能な限りこのおっぱいを目に焼き付けて、
今夜も妻のママコでオナニーをすると決め始めていた…。
今朝の罪悪感は一瞬で飛んでいた…。
このおっぱいを目の前にした途端、
まるでそうすることが当然のように…。
今夜のオナニーのための精液を
二つの金玉はすぐさま作り始めていた。
早く妻でオナニーがしたい。



くそ・・・イライラする、この胸を揉みたい、触りたい・・・
これだけでかけりゃパイズリもできるよな・・・。
エロマンガの中だけの話だと思ってたけど、
今日の前にそれができる肉がある。
でも、手が出せない・・・。
こんなおっぱいの中で精子出したら最高だろうな・・・。
くそ！くそ！
揉みたい揉みたい揉みたい
揉みたい揉みたい揉みたい！！



「おじさんどうしたの〜?♡」
「え?」

ハッと我に返った。
アヤちゃんが僕の勃起を完全に見ている。
完全にバれている。

「あ…こ、これは、あの、その」

僕はなんとかごまかそうと必死で頭を働かせた。
しかしパニックになって言葉も考えも浮かばない。

「ふ…ん…♡」

アヤちゃんはおっぱいをぎゅうぎゅう変形させながら、
いやらしいメスの目をして僕を見てきた。

そして、そのまま視線を僕のチ「コ」に向けた。

先走り汁が染み出してズボンを濡らしている。

もう言い逃れはできない。血の気が引いていく。



「おじさんもっ……♡アヤのおっぱいであそびたいのっ♡」

「ちゅ」



アヤちゃんがおっぱいをぎゅむぎゅむ寄せながら、
上目遣いで僕を見てくる。
「男の人はみんなね♡アヤのおっぱいで
あそびたいっていうよ♡」
遊ぶ？遊ぶってどうやって？
僕が聞く前にアヤちゃんが答える。
「ち♡ちゃんをおっぱいではさんで♡
こすってあげると♡みんなビクビク♡♡ってして♡
ち♡ちゃんからピュッピュ♡♡って白いの出ちゃうんだよ♡」
息があがる。心臓がバクバクする。
アヤちゃんから僕を誘っている…。





「あ、あそびたい・・・」



「えっ?♡」
アヤちゃんが聞く。
頭が真っ白になっていく...

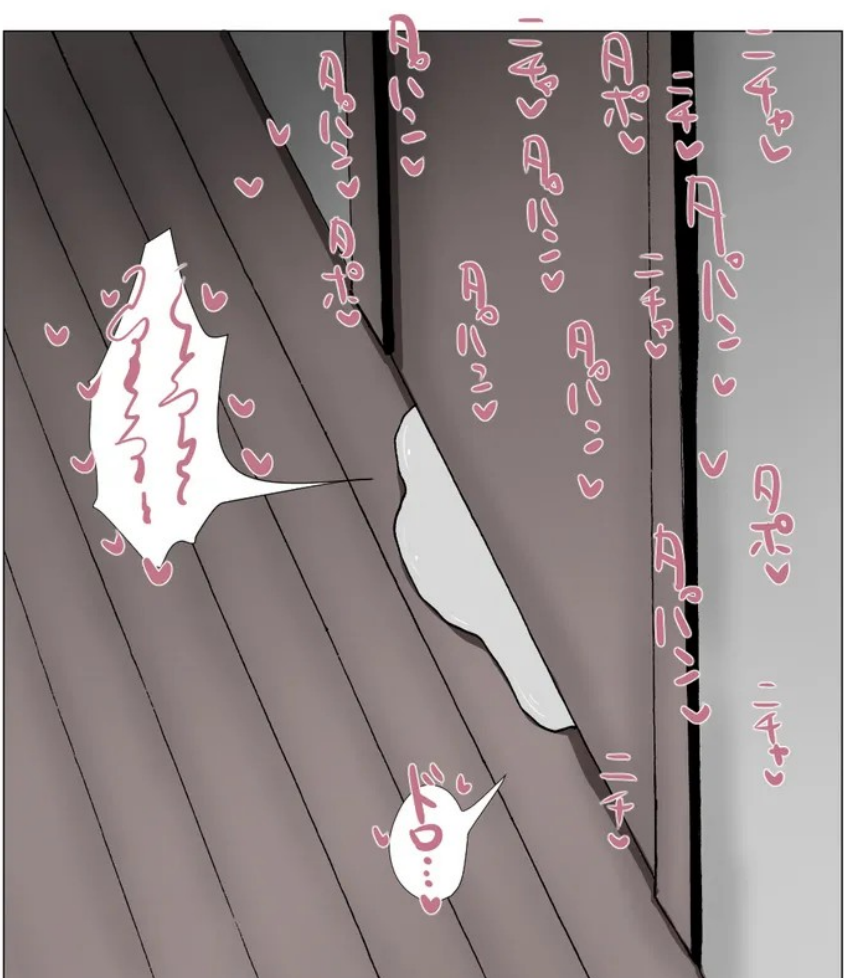
「あそびたい……！僕もアヤちゃんのおっぱいであそびたい……！」
僕はもうアヤちゃんのおっぱいしか見ていなかった。
思わず自分でチコを触り始めている。
はやくしたいはやくしたい。
はやくアヤちゃんのおっぱいでしたい。
「いいよ……じゃあアヤの家に……♡」
「うん……！♡いく……♡……♡……♡……♡……♡……♡」
ハアハアと息を荒げながら聞く。
「いいよ……♡……♡……♡……♡……♡……♡……♡」
アヤのおっぱいでたくさんあそぼうね♡♡
「あ……♡あ……♡」
精液が上がってくる。今からアヤちゃんのおっぱいで遊べる……。
夢みたいだ……。こんな爆乳を……。





そのまま僕はアヤちゃんの部屋についていった……。
僕はこのとき、もうもどってこれないところに
足を踏み入れていた……。

僕の部屋の隣の扉をあける。心臓がやばい。
どくどくと我慢汁を押しつけて精液がもう出始めている。
「こっちだよ〜♡」
「おじゃまします……」
アヤちゃんの小さな手に引かれて中に入る。
すると、あるドアの下の際間から
白い液体が漏れ出ているのを見つけた。
そのドアの向こうから、何か妙な音が聞こえる……。
パンパンと肉が叩き付けられるような音、
ビシャビシャと水が跳ねるような音、
そして……。男の喘ぎ声。



「~~~~~」

それはほとんどもう悲鳴だった。

「あ、サヤもう帰ってたんだ〜♡」

サヤとは、もうひとりの女の子だ……。

このドアの向こうにサヤちゃんがいる。

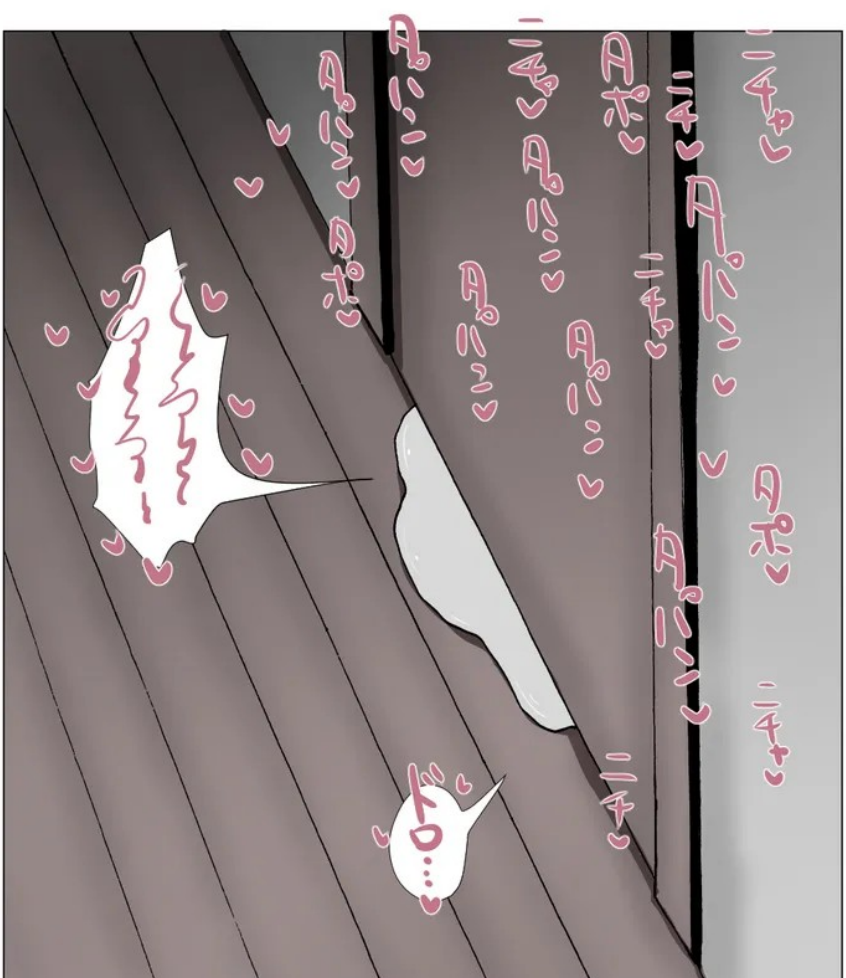
そして、この音、この声、この液体は……。

答えはわかっている。

このにおい……精液のにおい。

「パパと遊んでみたい♡アヤたちも早くあそぼ♡」
遊び…。トアのむこうで…。

サヤちゃんと二人のパパが遊んでいる…。



ブリブリブリブリブリブリ♡♡
「ふふふふ」

悲鳴は途切れることなく続いている。

「パパ…好き…♡好き…♡」

サヤちゃんのか細い声が聞こえてくる。とても甘い声。

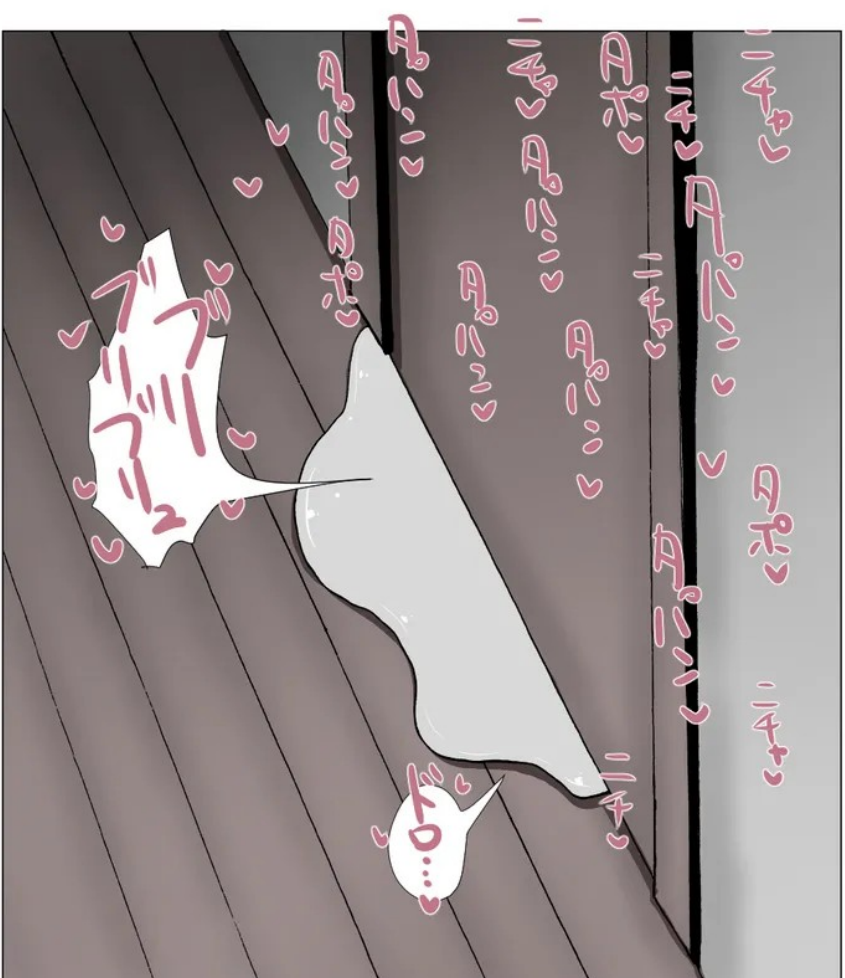
漏れる液体は、まさに今この瞬間、

どんどん量を増しているようだった。

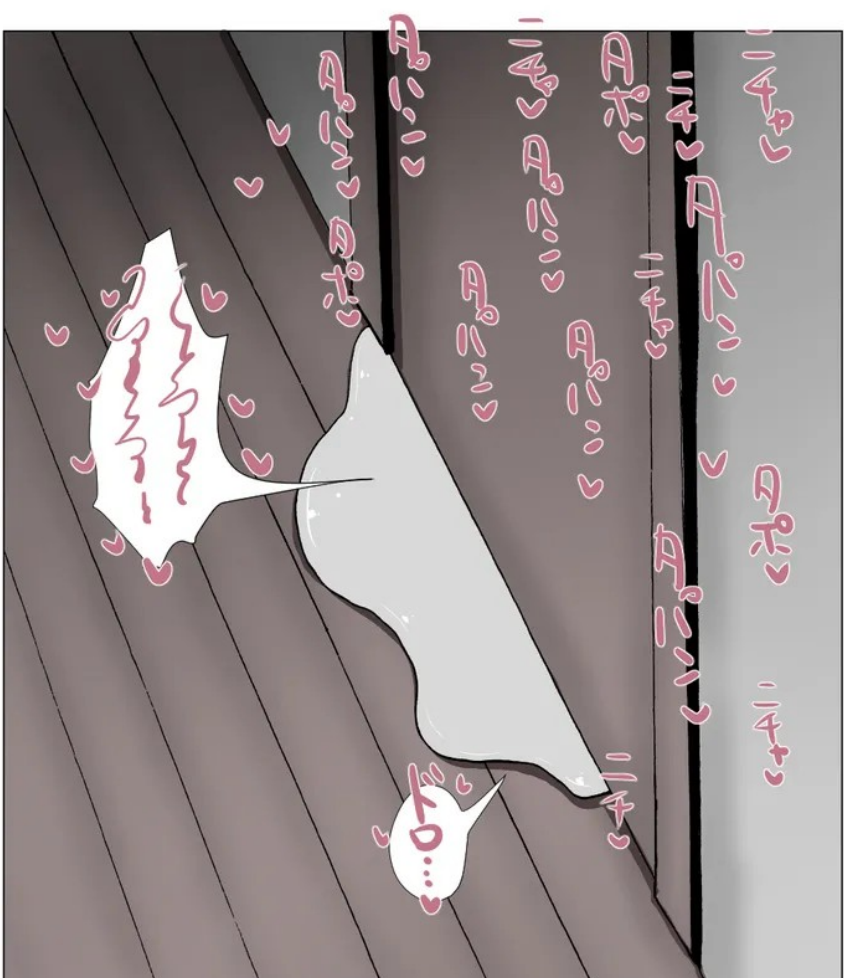
その量にぞっとした…。

いったいどれくらいの精液が出ているんだろう。

どれくらいの精液を搾られているんだろう。



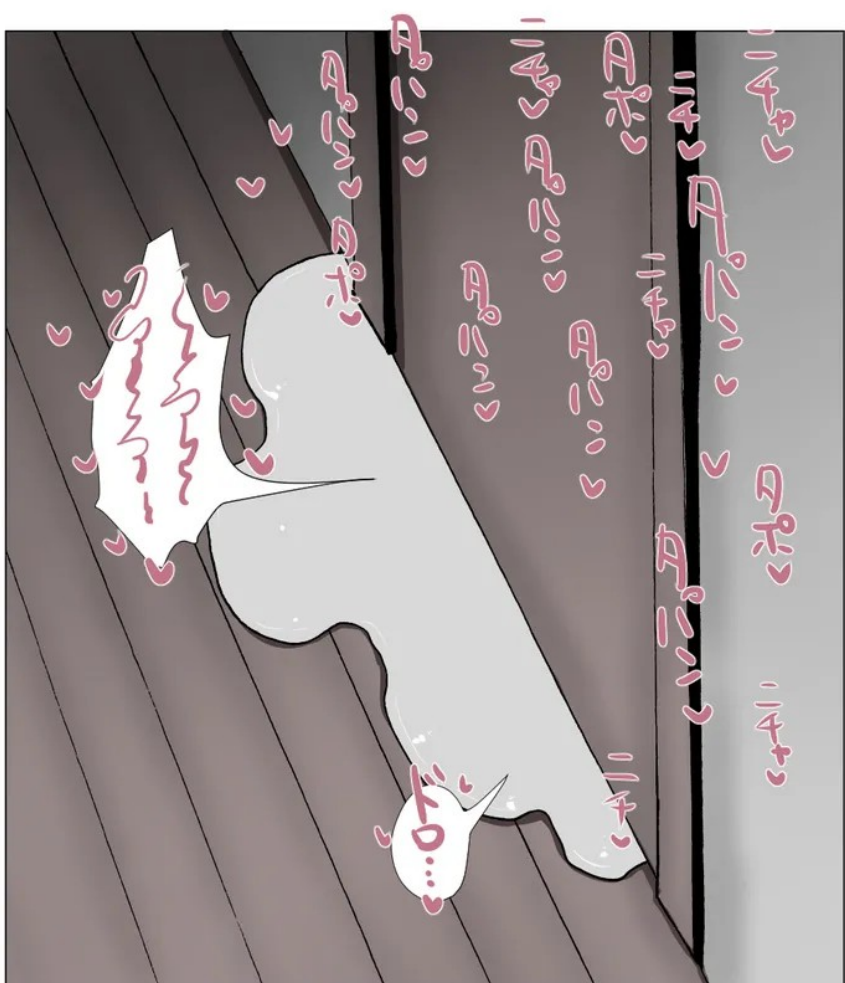
「や・ぢぢぢぢぢぢ」
パパのかろうじて絞り出すような声が聞こえる。
しかし、タパンタパンという音は
いっこうにやまない。
ニチャニチャと粘っこい液体が糸を引く音が
途切れなく続いている。



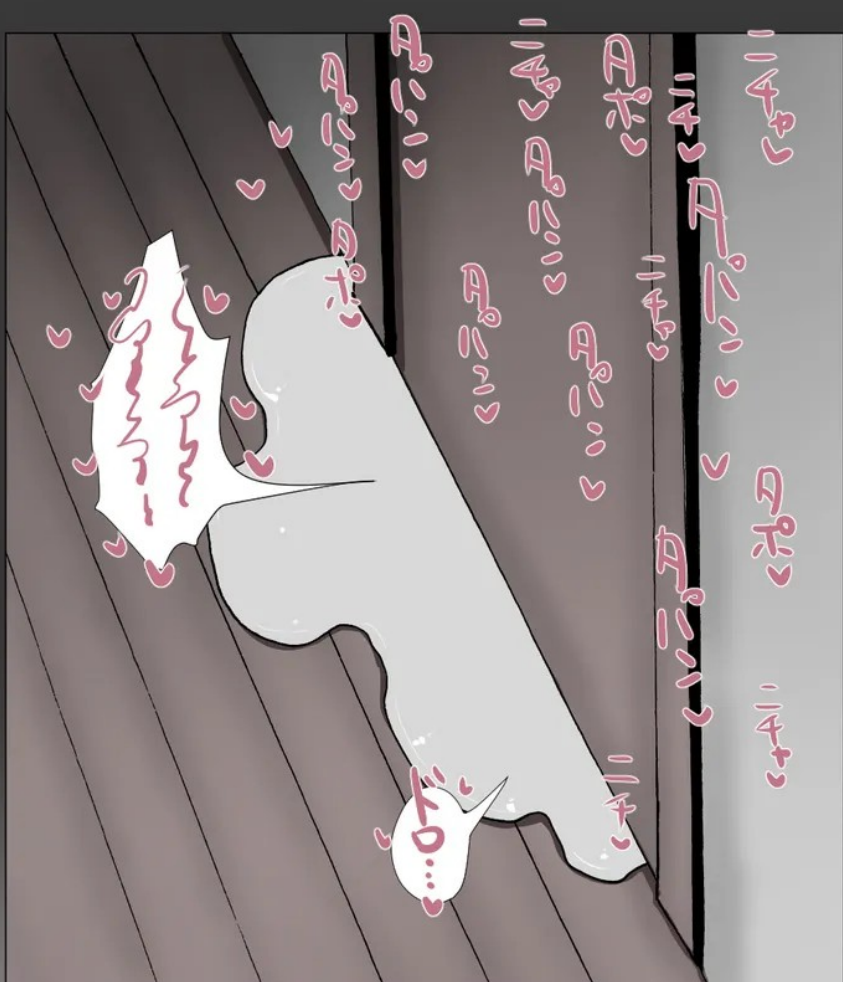
ブリブリユブリユボブリユ♡♡
まるで排泄するような音とともに、
床の精液がさらに増えていく。
どんどんどんどんどんどん増えていく。
「サヤったらズルいの♡♡
いっつもパパをひとりじめするんだよ♡♡」
僕はこの光景に足がすくんでしまった。
とてもまずいところに
来てしまったのではないだろうか…。
しかし恐怖の中で僕は勃起している。
扉の向こうで父親を犯し、おびただしい量の精液を
搾りだしているサヤちゃんを想像して。
ピュ…ピュ…♡と少し射精してしまう。



「でもいいもん♡
今日はおじさんが
おもちゃになってくれるんだもんね♡」
そう言っアヤちゃんが僕の腕に
おっぱいを押し付ける。
お…おもちゃ…。
そして理解した。



僕がアヤちゃんと遊ぶんじゃないくて、
僕でアヤちゃんが遊ぶのだ。



部屋に入った瞬間、すぐに僕は服を脱がされた。
もちろんバキバキに勃起している。

「わっ♡すっ♡い♡♡」

おじさんのけっこうおっきいね♡♡」

アヤちゃんの部屋と、アヤちゃん自身の甘い匂いが
さらにチ●コを硬くさせる。

アヤちゃんは服を脱ぎ、僕のチ●コにおっぱいをあてた。

(あ♡♡♡あ♡♡♡)

まだはさんでもないのに、僕は今にも射精しそうだった。
これは現実か？





バツとさらけ出したアヤちゃんのおっぱいが、
僕の子^こコに触れている...。
すぐ目の前にある...。
アヤちゃんは自分の膝に僕の腰をのせて、
完全にパイズリの体勢に入った。
ドクン...♡ドクン...♡
と子^こコが心臓に合わせてはねる。
ふと、妻の顔が浮かんだ...。
そして、僕の人生はこれで終わりになるんだと思った。
でもいい。これで終わってもいい。頭がしびれはじめる。
「ア、アヤちゃん、これは内緒だよ？」
「うんナイシヨね♡いいよ♡♡」
アテになるかわからない返事。



「じゃあ入れるね♡」
そして、
僕のチコは、
あっさりと、
アヤちゃんのおっぱいにのみこまれた。

僕はほとんど悲鳴のような声をあげた。

汗でヌルヌルしていて、それでいて、**熱く**、

なめるようにからみついてくる。

「え〜?♡もう?♡まだパンパンしてないよ♡」

僕はこのシチュエーションだけで完全に射精に向かっていった。

こんな小さな子のものすごい爆乳に挟まれて、それだけで射精するには十分だった。

「あ……♡♡♡出る……♡♡♡あ♡♡♡あ♡♡♡」





「は〜い♡♡まず一回♡♡」
「あ…♡♡♡あ…♡♡♡あ…♡♡♡あ…♡♡♡」
「あっけなく、射精した。」
「アヤちゃんのおっぱいの中で…」
「は〜い♡♡まず一回♡♡」
「アヤちゃんがぎゅ〜っとおっぱいでチ○を締め付けて、
尿道に残っている精子を全部搾りとりとうとしてくる。」



「あ♡♡だめ♡♡イったばかりで♡♡」
敏感になったチ●コに圧力がかかる。
精液が上がってくる。
また射精する。

ビュ〜〜〜! ビュルル! ビュー! ビュー!〜!♡♡♡
「また……♡♡♡あ……♡♡♡♡♡」
ビクビクと痙攣する。また出した……。
しかし、アヤちゃんの爆乳の中で精子は閉じ込められ、
谷間からは一滴も出て来れない。
「あはは♡もうでた♡二回目早いね♡
でも最初はみんなこんなものだよ♡
みんな百数えられないでイっちゃうんだよ♡」





そして、アヤちゃんはおっぱいを動かし始めた。
パンパンという音が部屋に響く。
さっきのあの部屋の前で聞いたあの音…。
「あ…♡♡だめ♡♡
アヤちゃん♡♡また♡♡で…♡♡」
「うんいいよ♡出してね♡はい♡1♡2♡3♡」

ピュ…ピュ…ピュ…♡♡♡
「うあ…♡♡♡あ…♡♡♡」
頭がビリビリする。目の前がチカチカと白くなる。
「はい♡三回目♡」
簡単に精子が搾り出された。
アヤちゃんに少し動かされただけで、僕はもう虫の息だった。
こんなにあっけなく、三回も射精したのは初めてだった。
妻のマコとはまったく違う、
桁違いの快樂…。





「まだまだいくよ〜♡」
またアヤちゃんのおっぱいが叩き付けられる。
ピタンピタン、ニチャニチャと、
僕の精液がアヤちゃんのおっぱいの中を泳ぐ音がする。
全身が痙攣する…。脳がジワジワと熱くなる…。
「まっ♡♡まって♡♡アヤちゃん♡♡ぼ♡♡僕♡♡まだ仕事♡♡」
からうじて発した声で、とっさに嘘をついた。
このままされたら意識が飛びそうになる。
「え〜？おしごとなの〜？」
まだ全然遊べてないのに〜」
「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡まだめっ♡♡♡♡」
もうほとんど息ができない。
「ん〜♡♡♡じゃあ最後の一回ね〜♡♡♡」
全部出し切らなきゃだめだよ♡♡」

ビュルルルル！♡♡♡ビュルルル♡♡ブュル♡♡♡
「あ~~~~~」

悲鳴をあげて、僕は四回目の射精をした。

こんな一瞬で…こんな容易く…。

「じゃあおじさんまた今度ね♡♡♡」

ねえねえ♡明日はこれる？♡♡あさっては？♡♡♡

「あ…♡♡あ…♡♡♡あした…♡♡♡」

「明日くるの？♡♡♡うんまってるね♡♡♡約束だよ？♡♡♡」

半分飛んだ意識で約束をしてしまった。

そして、僕はもう二度とアヤちゃんのおっぱいから

逃げられない身体に、

たったこの数分の遊びで変えられてしまった…。



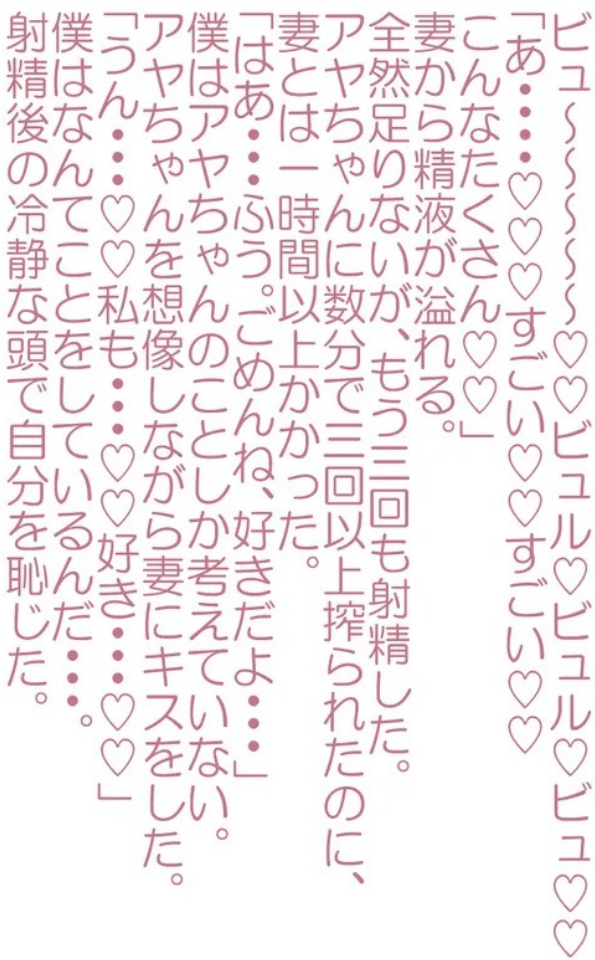
その後、なんとか部屋にもどった僕は、
気絶するように何時間もベッドに倒れたままだった。
心配そうに声をかけてくれる妻に
返す言葉もなく、声も出せなかった…。





次の日の朝、意識が完全に戻ると同時に、僕はすぐに妻を半ばレイプするように犯した。夢の中でもアヤちゃんのおっぱいが、繰り返し返し流れてきて、起きたときにはチンコはもうパンパンだった。「あ♡あ♡あなた♡だめ♡ちこくしちゃうわよ♡」「ごめん、あと一回、あと一回」アヤちゃんのおっぱいを思い浮かべながら腰をふる。昨日の快楽には到底及ばないが、なんとか射精までもっていけそうだった。「あつ、出る。出るよ」





「あ……♡♡♡す♡す♡い♡い♡♡す♡す♡い♡♡」
 ビュ♡♡♡♡♡ビュ♡♡♡♡♡ビュ♡♡♡♡♡
 こんなたくさん♡♡」
 妻から精液が溢れる。
 全然足りないが、もう三回も射精した。
 アヤちゃんに数分で三回以上搾られたのに、
 妻とは一時間以上かかった。
 「はあ……♡♡♡ふ♡う♡め♡ん♡ね、好きだよ……」
 僕はアヤちゃんのことしか考えていない。
 アヤちゃんを想像しながら妻にキスをした。
 「うん……♡♡♡私も……♡♡♡好き……♡♡♡」
 僕はなんてことをしているんだ……♡♡♡
 射精後の冷静な頭で自分を恥じた。

妻を使っオナニーして自己嫌悪していたのに、
会社で仕事に集中できなかったら、
少しもアヤちゃん顔が浮かんでくる。
ミスの頭は昨日した遊びの約束のことで
僕も頭は昨日した遊びの約束のことで
いっばいだった。
まずい：目の前が真っ白になってぼやけていく。
何も手につかない。
このとき、僕にはまだ意識が
残っていたのかもしれない。
アヤちゃんとの約束をやぶるべきだろうか……。
次あんなことされたら、どうなるかわからなかった。



体調が悪いと思われたのか、今日は帰っていいと言われた。そして、家の前まで来たところに、アヤちゃんは立っていた……

「あゝ♡おそいよゝ♡まっただんだからゝ♡」

たぶたぶとおっぱいを揺らし、すねるようなそぶりを見せる。僕の子は、一瞬で交尾の体勢に入った。

そして、今までの葛藤も吹き飛んでしまった……

「こ……♡ごめんね……♡会社だったんだ、でも途中で抜けてきたから……♡♡」

「えゝ？♡おしこいいのゝ？♡」

「だめだけど……♡ぼく……♡♡」

「ふゝん♡そんなにアヤとあそぶの楽しみだったんだゝ♡」



ぶるぶると誘ってくるおっぱいに
僕はもう我慢ができなかった。
「ア、アヤちゃんのおっぱいに抱きついていい……っ♡」
「うん、いいよ♡ほら♡」
アヤちゃんがおっぱいをグイと前に突き出す。
シャツがさらにパツパツとやぶけそうになっている。
僕はそこに顔を挟んだ。
アヤちゃんのおっぱいの隙間からは、精液のにおいがした。



「今日も誰かと遊んでたの……?」
「うん、えっとね……♡佐々木先生と♡
阿部先生と♡木下先生と♡
あとジユンくん……♡アキラくん……♡
カズくん……♡」
「アヤちゃんが名前を羅列しだす。
そして、それがいつまでも終わらない。
「あと、三階のおにいさんと♡……♡」
ゆうに三十人は超えている。
僕は嫉妬でおかしくなりそう、途中で止めた。
「ほ、僕だけと遊ぶことはできないの……?」
馬鹿馬鹿しい質問をする。
「え……♡わがままちゃんなの……♡
アヤをひとりじめしたいんだ♡」



「アヤのこと好きなんだ〜?♡」
「…うん♡好き…♡好きになっちゃったよ…♡」
「でもごめんね♡アヤもみんなと遊びたいし♡
みんなもアヤと遊びたいって言うもん♡」
わかりきっていた答え。
おもちゃは多い方がいいに決まってる…。
僕も他の男もみんな、
アヤちゃんのおもちゃのひとつにすぎない…。
「は♡はやくあそびたい♡僕のちんちん、
アヤちゃんのおっぱいで
遊びたいよ♡」
「うんうん♡じゃあお部屋はいりまちようね♡」



ブリブリブリブリ♡♡♡

例の部屋からは今日も精液が漏れ出ている。
その量は昨日よりも増えているようだった。

「……」

「パパ……♡パパ……♡」

サヤちゃんの甘いささやき、パパの悲鳴。

僕の勃起がさらに強くなる。

「今日もパパとられてるの〜」

朝に十回ぐらいしかイかせられなかったよ〜」

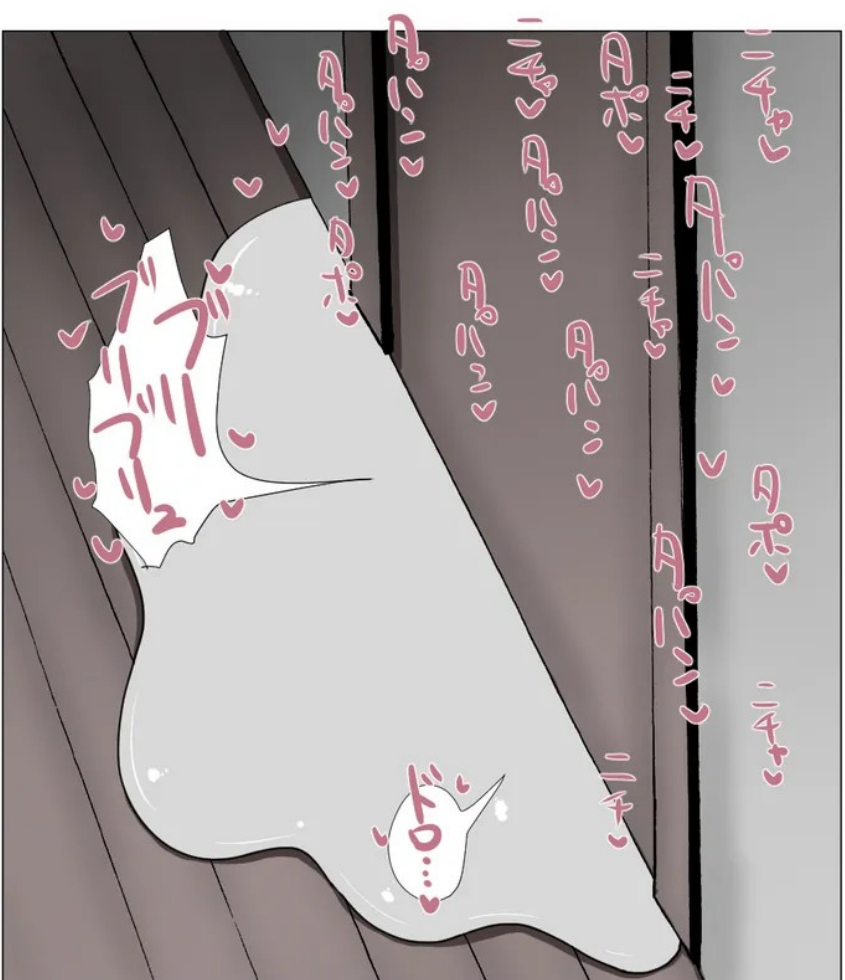
十回……。それだけできつと意識が飛んでしまうだろう。

そして、それ以上、何倍もの数、

サヤちゃんは父親をイかせ続けている……。

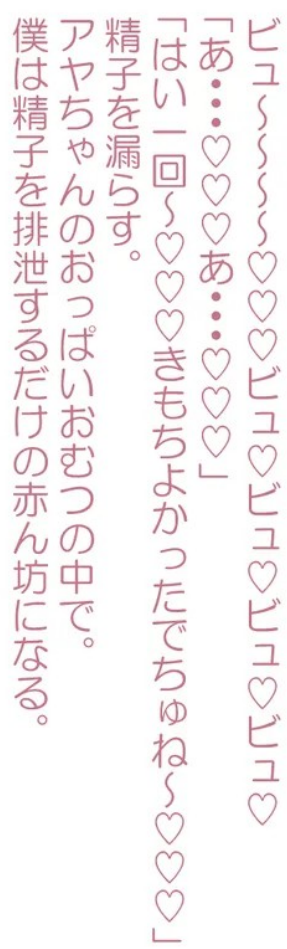


ブリブリブリブリユブリユ♡♡♡
精液はさらに増える。
ビチャビチャビチャと
水たまりを踏むような音が響く。
あっちの部屋はもはや
精液のプールになっているのだろう…。
父親の体液がすべて精液として
搾り出されている…。
「…ね♡ね♡あそぼっか…♡♡」
「…うん♡」
僕の子こからよだれのように
我慢汁がだらだら垂れてくる。



「あ……♡♡♡あ……♡♡♡」
そしてパイズリが始まる。
今日は最初からおっぱいを叩き付けてきている。
あっという間に精液は上がってくる。
「も……♡♡♡でる……♡♡♡もう……♡♡♡」
「はやく♡♡♡いい♡♡♡まず一回目♡♡♡」
出しておきまちょうね♡♡♡」
ピストンが加速する。
もうおっぱいの感触と射精のことしか考えられない。
出す。
アヤちゃんのおっぱいの中で。
おもちゃにされて無様に……。





「あ……♡♡♡あ……♡♡♡」

「はい一回♡♡♡きもちよかったでちゅね♡♡♡」
精子を漏らす。

アヤちゃんのおっぱいおむつの中で。

僕は精子を排泄するだけの赤ん坊になる。

「ね〜ね〜♡♡♡これ飲んで〜♡♡♡」
「アヤちゃんが何かを渡してくる。」
「チカチカする眼でころうじて、それがカプセルだとわかる。」
「な…なに…?これ…」
「これを飲むと〜♡♡」
「ピュッピュが止まらなくなるんだよ〜♡♡」
「たくさんたくさん遊べるようになるの〜♡♡」
「あやしいドギツイ赤色。」
「完全にヤバイ薬に見える…」
「どこでもらったの…?」
「えっとね〜♡♡前に黒人さんと遊んだときに
黒人さんが使ってたの〜♡♡」
「たくさんおっぱいしたら黒人さん
返事しなくなっちゃったからもらってきちゃった〜♡♡」

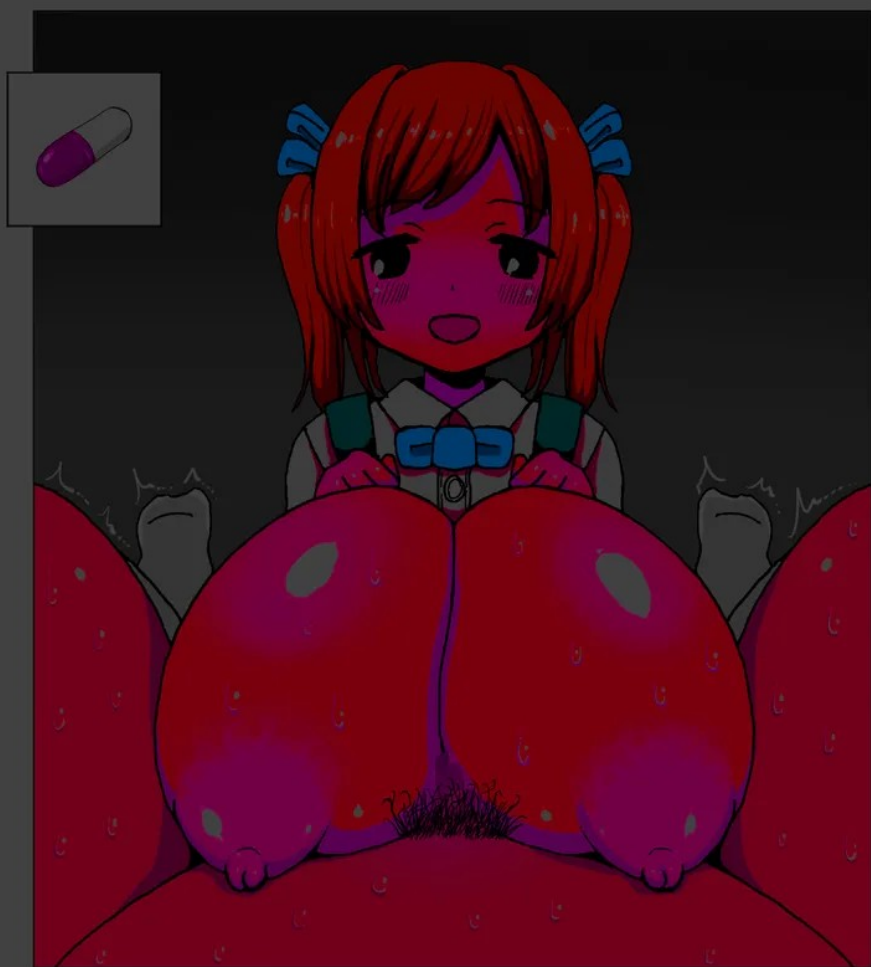




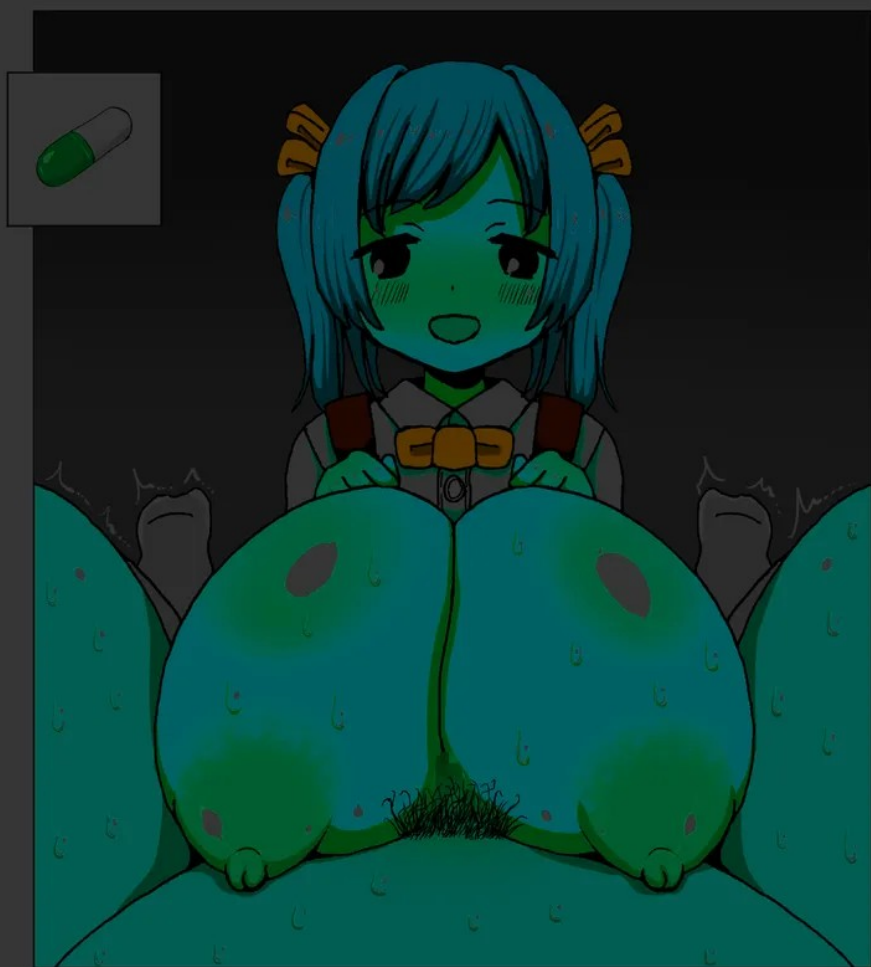
「パパに飲ませたらすぐなくなったんだよ♡♡
ずっつとピュッピュできるの♡♡♡
ワンちゃんみたいになって♡♡♡
グルグル♡ワンワン♡って♡」
ドクン…ドクン…♡
僕は恐怖しながら、興奮している。
ああいう風になってしまう…。
ただ精液をつくるだけの肉の塊になる…。
そして、快樂の中で獣のように言葉を失う…。
アヤちゃんの完璧なおもちゃになる…。
二人の父親のように…。

「ね〜♡ね〜♡これ飲んで♡
サヤばかりパパひとりじめしてずるいの♡
アヤのパパになって?♡」
「ア…アヤちゃんのパパに…?♡」
ぐらっとくる。
僕が…アヤちゃんのパパ(おもちゃ)に…。
答えは決まっている。
「なる…♡なる…♡アヤちゃんのパパになる♡」
「ありがと♡じゃあパパ♡」
「これ飲んでアヤとたくさんたくさん遊んでね♡」
ゴク…ゴク…。
僕は薬を飲んでしまった。

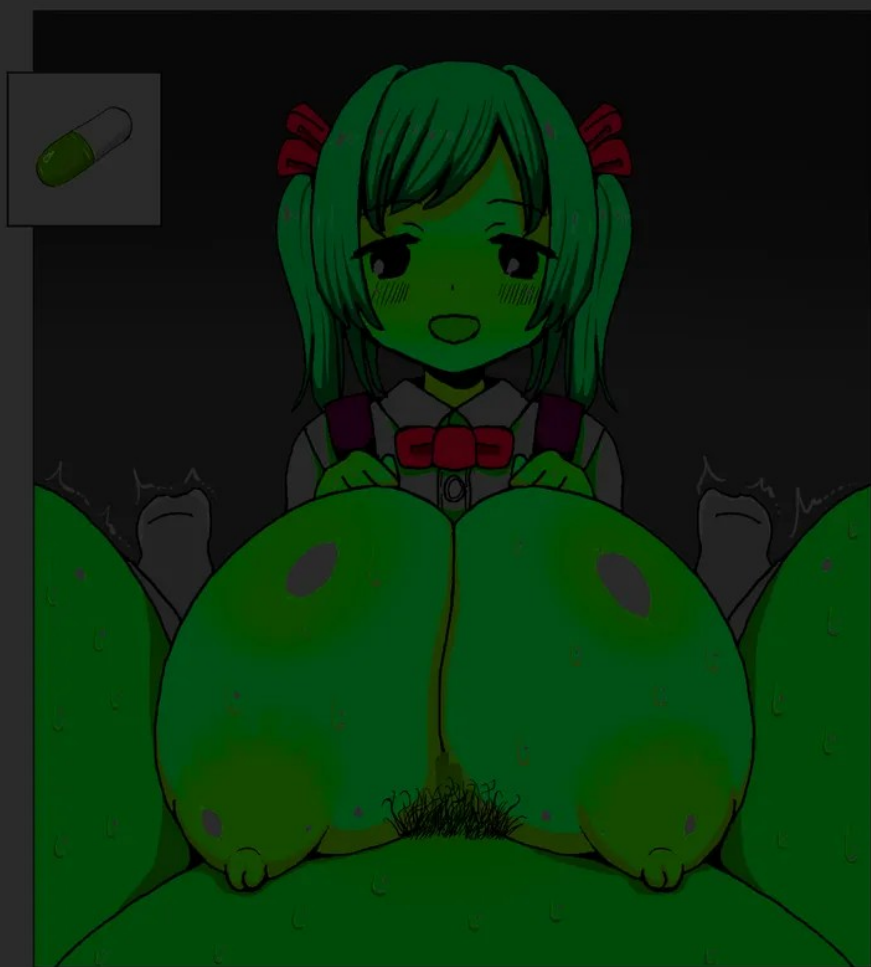




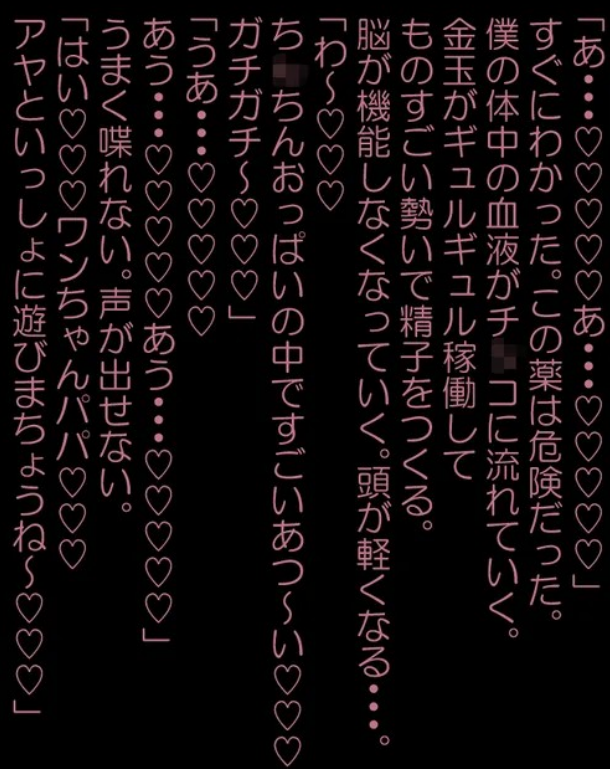
ニク



ニク
グ
ド



ニグド

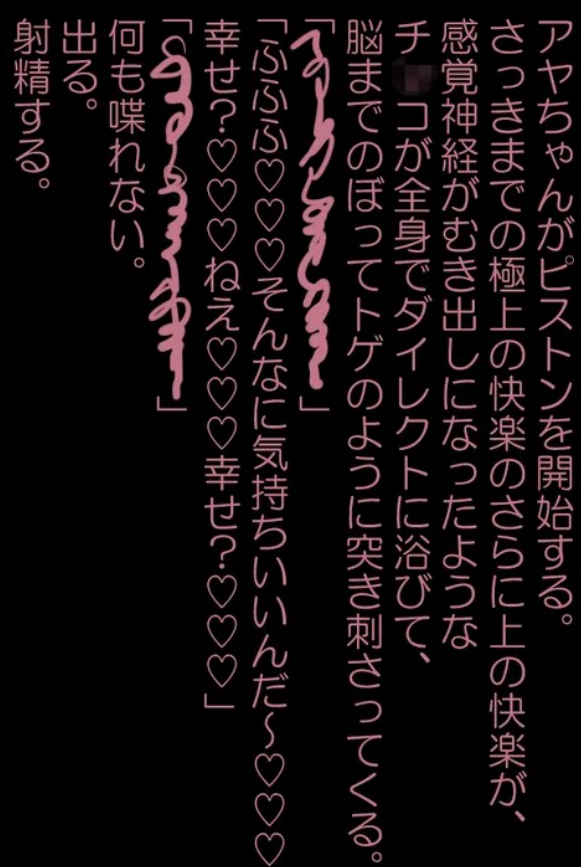


「あ……♡♡♡♡♡♡あ……♡♡♡♡♡♡」
すぐにわかった。この薬は危険だった。
僕の体中の血液がチ■■□に流れていく。
金玉がギョルギョル稼働して
ものすごい勢いで精子をつくる。
脳が機能しなくなっていく。頭が軽くなる……。
「わっ♡♡♡♡♡」

ち■ちゃんおっぱいの中でずいあいっ♡♡♡♡♡♡
ガチガチっ♡♡♡♡♡」

「うぁ……♡♡♡♡♡♡あう……♡♡♡♡♡♡」
うまく喋れない。声が出せない。

「はい♡♡♡♡♡ワンちゃんパパ♡♡♡♡♡」
アヤといっしょに遊びまちょぅねっ♡♡♡♡♡」



アヤちゃんがピストンを開始する。
さっきまでの極上の快樂のさらに上の快樂が、
感覺神経がむき出しになったような
チ■コが全身でダイレクトに浴びて、
脳までのぼってトゲのように突き刺さってくる。

「ふふふ♡♡♡そんなに気持ちいいんだ♡♡♡
幸せ?♡♡♡ねえ♡♡♡幸せ?♡♡♡」

何も喋れない。
出る。

射精する。



「あ...あ...あ...」
♡♡♡



「あ...」
♡♡♡

「わっ♡♡♡すっ♡♡♡」
 こんなにたくさん♡♡♡」
 異常なまでの射精量に血の気が引いていく。
 体中の血液、胃液、すべての体液が、
 チコから出て行く感じ・・・。
 まずい。
 死ぬ。





「出して♡♡♡出して♡♡♡
ワンちゃん♡♡♡ばぶばぶワン♡♡♡
ばぶばぶワン♡♡♡」
ピストンがさらに強まる。
体中の水分が下半身におりてくる。
「ふふふふふふ」
「快乐が痛い。
チンコが。
頭が。
眼が。
全身が痛い。」

「子」

「わすれっ♡♡♡すっ♡♡♡いっ♡♡♡」

下痢のような音を出しながら、精子を吐き出す。

死んじやう……。

死んでしまう…。





「うん…♡♡♡
でもこのへんにしておこうかな♡♡♡
パパみたいになっちゃうと困るもん♡♡♡」
「アヤちゃんがおっぱいを止める。
(やめないで…♡♡♡もっとして…♡♡♡)
しかし言葉が出ない。
「おじさんパパのこと大事に大事にするね♡♡♡
また次つづきしようね?♡♡♡
あ、寝ちゃうの♡♡♡
トロ〜ンって白目むいてかわいいね♡♡♡
よだれたくさん出てるよ♡♡♡
も♡♡♡しょうがないでちゅね♡♡♡
じゃあ、おやすみなちゃん♡♡♡」





♡♡♡...♡♡♡

[.....]

どうやって戻ってきたのか。
わからないが、気づくとベッドの上にいた。
僕は丸二日寝ていたようだった。
まるで全部夢だったようだ。。。。
しかし、手足がまともに動かず、
全身はやせこけていた。。。。
下半身のたるさ。。。。
もちろん夢ではない。。。。

妻は僕につきっきりで
看病してくれていたようだった。
しかし、目が覚めてすぐにきたのは、
異様な性欲だった。
あの薬がまだ効いているのか。
もうだめだ、理性がきかない。
今すぐ精子を出したい。
射精したい。
すぐに部屋をとびだして、隣に向かう。
でも鍵がかかっている。
アヤちゃんは留守だ。



「あ♡♡♡あ♡♡♡あなた♡♡♡だめ♡♡♡
そんな♡♡♡はげしく♡♡♡」
僕はムラムロを妻にぶつけることにした。
ただただ腰を打ち付ける。
妻はもうたのオナホだった。
アヤちゃんのおっぱいを想像しながら
チコをこするための…
「う…出る…」

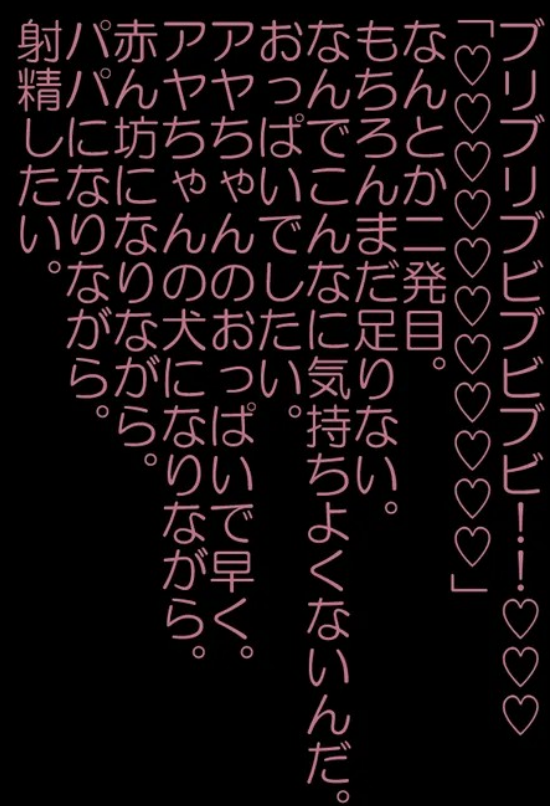


「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
オナホが悲鳴のような嬌声を上げる。
ものすごい量の精液をオナホに注ぎ込む。
オナホの腹がぱんぱんに満たされて
妊婦のように膨らむ。



まだまだ終わらない。
こんなの快楽じゃない。
まったく気持ちよくない穴で
なんとか射精に持ち込むのは苦勞する。
僕はオナホの奥限界まで
チコを突入れてピストンする。
「あ……♡♡♡あなた……♡♡♡
だめ……♡♡♡死ぬ……♡♡♡」
オナホがしゃべる。こるさい。
大人しくチコを入れられてろ。





「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
「ブブリブリビビビビビビ！」

「なんとも、ちゃんとこんまだ足りない。」
「おっぱいでんたい。気持ちよくないんだ。」
「アヤチャいのおっぱいで早く。」
「アヤチャんの犬になりながら。」
「赤パンにのりながら。」
「パパンになりなさい。」
「射精したい。」

そのまま三時間オナホでオナニーしたが、
ムラムラはいつころにおさまらない。
早くかえってきて。
アヤちゃん、アヤちゃん。
もう限界だ。
ピュッピュしたい。



オナホに出しては隣にいつてを繰り返している、
とうとうアヤちゃんが……と思ったら、
玄関の前にいたのはサヤちゃんだった。
「サ……サヤちゃん……？」
「あ……おとなりさん……」
サヤちゃんのか細い声。
僕は勃起している。
サヤちゃんのおっぱい。
あのときの挨拶以来の……。



サヤちゃんのおっぱいを凝視する。
「あ…あの…」
サヤちゃんが恥ずかしそうに身体をもじもじさせる。
おっぱいがぎゅうぎゅうと変形する。
したい。
サヤちゃんのおっぱいでしたい。
「おじさん…アヤとあそんでるんですよ…」
サヤちゃんが小さくつぶやく。



「う……うん……♡
僕、アヤちゃんのパパになったんだ……♡」
「あ……あの……
アヤのパパってことは……サヤのパパにもなってくれるの……？」
サヤちゃんが言う。
サ……サヤちゃんのパパに……？僕が？
「あのね……パパのこと好き好きすぎて
パパ動かなくなっちゃったの……。
今病院いっちゃったんだ……。
パパが治るまで、私のパパいないの……」
ドクン、ドクン。
心臓が痛いほど鳴っている。





「だから…」
「うん…なる♡なる♡
サヤちゃんのパパにもなる♡
僕♡パパになる…♡」
「ほんと…」
サヤちゃんがうれしそうにする。
「サヤちゃんのパパだよ…♡♡」
もう射精ギリギリだ。
はやくサヤちゃんと遊びたい。
「じゃあパパ…♡きて…♡♡
サヤといっしょになろ…♡♡」
サヤちゃんの部屋に引きずりこまれる…。

「パパ…パパ…♡」
サヤちゃんのピストンは最初から容赦なかった。
アヤちゃんの愛でるような撫でるような
パイズリとは全然ちがう。
これは暴力だ。
おっぱいでチ■コをリンチされている。
こんなパイズリを…サヤちゃんのパパは…
そして今…僕がサヤちゃんのパパなのだ…。





「ああああああああ♡♡♡♡♡」
「パパ…好き…パパ…」
サヤちゃんはピストンをゆるめない。
おっぱいを腰にいたいぐらいに
ぶつけてくる。

ブリブリブリユブリユブビュー~~~~!!!!……♡♡♡
三十秒もたずに二回目の射精。
しかしサヤちゃんのおっぱいはどんどん加速する。
「あ……♡♡♡だめ……♡♡♡
サヤちゃん……♡♡♡死……♡♡♡」



「出して出して♡♡♡♡
出してパパ♡♡♡」
射精中のチコにおっぱいをたたきつけ続ける。
容赦ない。
止めてくれない。
頭がいたい。
チコが悲鳴をあげる。
死ぬ。
殺される。





ブビュ〜〜♡♡♡♡
ブリブリュブリュブリュー!♡♡♡♡
一瞬で僕の体液はほとんど搾られた。
しかし…とまらない。
また続く。まだまだ続く。
「ブビュ〜〜♡♡♡♡」
言葉を発せられない。
ただただ搾精される。
乳牛のように搾られる。
意識が飛びそうなところに、
快樂が追い打ちをかける。

「ただいま……って、あーサヤするーい！アヤのパパなのに！」
アヤちゃんの声が聞こえる。
アヤちゃんが帰ってきたようだ。
「だって…サヤのパパにもなるって
いってくれたもん♡」
「え…そうなの…？ずるいよ。」
パパのこと壊しちゃったくせに」
壊される。
僕も壊される。
サヤちゃんに。娘に。
身体中の液体を全部搾られて。
壊される。死ぬ…。



「じゃあ二人でしよ……」
アヤちゃんとサヤちゃんのおっぱいで僕のちんこが埋まる。
「あ♡♡♡♡♡あ♡♡♡♡♡あ♡♡♡♡♡」
「も……しょうがないな」
パパ♡おくすりの時間だよ♡
アヤのぶんのピュッピュもたくさんつくってくれるよね♡
「アヤちゃんがクスリを口にねじこんでる。
一つ。二つ。三つ。四つ。五つ……
一体いくつ飲まれたんだろう。
この前以上の快樂がくる……」
「あ……♡♡♡♡♡」
ドクン。ドクン。ドクン。



ブリブリブリブリブリ！！！！！！！！
「わっ♡♡♡♡出たっ♡♡♡♡」
「たくさん出たね…♡♡♡♡」
チッコに激痛が走る。
出血するように射精する。
止まらない。
上半身が冷たくなっていく。



「ほらほら♡♡もっと♡♡」
「もっともっともっと♡♡♡♡」
悲鳴も出せない。
チ██この感覚だけが全て。
また出る。
出続ける。



もう声は出せない。
全身は痙攣し続けている。
電気ショックを受けているように
ガクガクする。
また出る。
そして僕は死ぬ……。

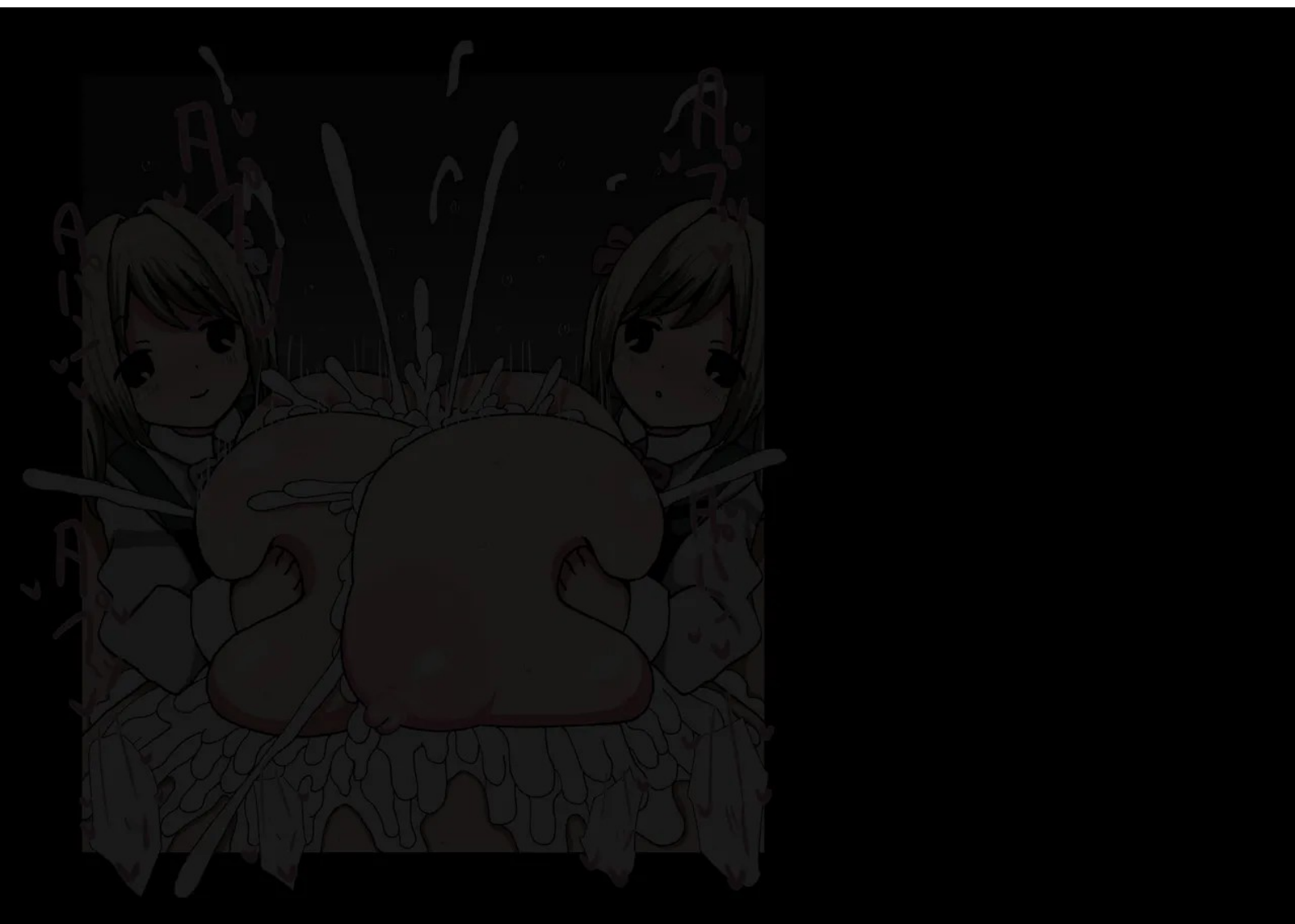


ブリュブシャアアアアアアアアー!!♡♡♡♡
「わ~~~~♡♡♡♡ふんす~~~~♡♡♡♡
すごいす~~~~♡♡♡♡
いい子いい子♡♡♡♡
ばぶばぶ♡♡♡♡ばぶばぶ♡♡♡♡」
「赤ちゃんパパ気持ちいいでちゅか……♡♡♡♡」
もう射精の音じゃない。
僕は何を出しているのか。



まだまだピストンは続く。
僕は意識を失った。
暗い暗い闇に落ちていく…。
もうこのおっぱいを感じることが出来ずに…。
ここで死ぬ…。









どれだけの時間がたったか……。
目覚めたとき、
僕の目の前は真っ暗だった。
柔らかな闇。
それはサヤちゃんのおっぱいだった。
そして、チ「にはアヤちゃんのおっぱい。
「あ……起きたみたい♡♡♡」
「パパ……今日もたくさんしようね♡♡♡」
意識の無い間も僕は二人のおもちゃとして
精子を排泄し続けたようだった。





ブリブリブリブリ……♡♡♡♡
「はっ！お目覚め！ユュユユ♡♡♡♡
気持ちいいでちゅから♡♡♡♡」
顔とチ●コを同時にこすられながら射精する。

今は何月の何日か……。
そんなことどうでもいい……。
僕はただ射精するだけの存在。
他に必要なものはなにもないんだ……。
「あ♡♡♡また出る?♡♡♡
いいよ♡♡♡出して♡♡♡♡♡
はい、プュッ♡♡♡♡♡」





ブシャアアアアアアアアアアア！！♡♡♡
ブリュブリュブリュブリュブリュ！！♡♡♡
身体の液体をすべて吐き出す。

また僕は意識を失う……。
そして射精の快楽でまた眼を覚ます。
気を失う。

その繰り返し……。。

パイズリされ続ける……。。

妻……。。

会社……。。

一瞬、そんな単語が浮かんだ。

しかしすぐに消えていった。

僕は犬。赤ちゃん。パパ。そしておもちゃ……。。

ただ精子を出し続けていればいいんだ……。。



また、闇に落ちていく・・・。